藤野千夜『夏の約束』を「クィア」で読む

Reading Fujino Chiya's *Natsu no Yakusoku* with Reference to "Queer"

黒岩裕市

要旨

「クィア」は「論争的な言葉」である。本稿では、現在の「クィア」のいくつかの用法を概観したうえで、「クィア」と関連づけながら、藤野千夜の『夏の約束』（初出：『群像』一九九九年一二月号）という小説に目を向ける。本稿の第1節では『夏の約束』を肯定的にとらえる見解を、第2節では否定的にとらえる見解を踏まえ、それらを再検討しながら、『夏の約束』における性的マイノリティの表象のされ方やその戦略性を考察する。続く、第3節では作中で話題になるキャンプがテクストでどのように語られるのかをたどる。『夏の約束』ではキャンプは実現されず、未来に先送りされることになるのだが、「クィア」と未来性を結ぶ議論を参照しつつ、その点に光を当てる。さらに、そうした未来性としての「クィア」が「日常」に散りばめられていることも確認する。このようにして、「クィア」を手がかりに『夏の約束』を読むことが本稿の目論見である。

キーワード

藤野千夜、『夏の約束』、クィア、未来性

はじめに

「クィア」は「論争的な言葉」である。[1] 最初に確認しておくと、「クィア［queer］」とはもともとは英語圏で「オカマ」や「変態」を意味する強い侮蔑語であったが、エイズ危機を背景に、一九八〇年代後半からアクティヴィズムの中で価値転覆的に用いられるようになった。それは「クィア」を自称として肯定的に引き受けることで、「クィア」という言葉で他者を貶めようとする人びとの側の「普通」や「あたりまえ」を根本的に問い返すという戦略である。一九九〇年にテレサ・デ・ラウレティスが主催した「クィア・セオリー」という学術会議を契機に、九〇年代にはアカデミズムの領域でも「クィア」は使われるようになった。

現在では、「クィア」は「性的マイノリティに含まれるさまざまなアイデンティティの総称［……］として、やや脱政治化されたかたちで使用されてもいる」が、「ＬＧＢＴ」よりも「包摂的な総称」だと評価する人や、「総称」としての「クィア」に「より多くの人たちによる連帯」の可能性を見出す人もいる。一方で、「総称」としての「クィア」は集団間・個人間の差異の軽視を招くと警戒する人、また、「クィア」をアイデンティティ・カテゴリーとして使うと、「クィアな人たち」とそれ以外との二項対立が固定化されるということを批判する人もいる。この批判は、ある性のあり方を規範化し、別の性のあり方を周縁化するような見方を再検討する「視点」としての「クィア」を重視する立場と重なる。[2] このように「クィア」は今なお多義的で「論争的」であるわけだが、その多義性ゆえにさらなる意味づけなおしに開かれたものでもあり、そこに「クィア」の潜在的な力があるだろう。[3]

本稿ではこうした「クィア」に関する基本的な議論を出発点に置きつつ、『群像』一九九九年一二月号に発表され（初刊は二〇〇〇年）、二〇〇〇年に第一二二回芥川賞を受賞した藤野千夜の小説『夏の約束』を取り上げる。本稿の第1節では『夏の約束』を肯定的にとらえる見解を、第2節では否定的にとらえる見解を踏まえ、また、「クィア」とも関連づけながら、『夏の約束』における性的マイノリティの表象のされ方を考察する。続く、第3節では作中で話題になるキャンプに注目し、それがどのように語られるのかをたどる。その際に、「クィア」と未来性を結ぶ議論をも参照する。このような流れで、「クィア」を手がかりに『夏の約束』を読むことが本稿の目論見である。[4]

1. 松井マルオは「柔軟」で「タフ」なのか

『夏の約束』では、新宿副都心の会社に勤める二九歳のゲイ男性の松井マルオ、マルオのパートナーでフリー編集者の二七歳の三木橋ヒカル、美容師でトランス女性である二六歳の平田たま代、「菊ちゃん」と呼ばれる二五歳の売れない小説家である田辺菊江、会社でトラブルを起こした二四歳の岩淵のぞみ、「マルオが今住んでいる二階建て一軒家の一階部分に住んでいる」（二〇頁）[5] 岡野かおるといった都内在住で比較的近くに暮らす人びとの緩やかなつながりが語られる。発表当初から、『夏の約束』の作品世界は「どちらかというと世間の普通の感覚でいう社会人の規範からは外れた人物たち」の「ぬくもりのある交流」[6]、「世間の約束事とは少しずつずれた場で生きる二十代の人間達」の「不思議に自由で伸びやかな生活空間」[7]、「少しハズれた彼らの日常」[8]などと紹介された。マルオに焦点化した語りが多く用いられるため、マルオ自身やヒカルとの交際に光が当てられることになるが、菊江やのぞみに焦点

化した語りが用いられる章もある（十一の章で構成されている）。

『夏の約束』にはゲイ男性やトランス女性に対する差別も書き込まれている。たとえば、外出する際、いつも手をつなぐマルオとヒカルは、それゆえに街中で目立つ。第四章には「中学受験で有名な進学塾の生徒」らしい小学生の一群が、すれ違いざまに「すげえ、とか、いつものやつら発見、とか、ホモデブゥ、とか口々に発し」、全速力で路地に駆け込み、マルオとヒカルのことを覗き見るという場面がある。「全然すごくなんかないじゃん。あいつら世間のこと、なんにも知らねえのかよ」、「あのうち八割はそのまま大人になって、一生誰かを笑っていくんだね」と怒りを露わにするヒカルに対して、マルオは「手をつないだゲイ・カップルが街を歩く以上、その程度のことでいちいち腹は立てていられない。それにヒカルはともかく、マルオはたしかに肥満体だ」と思い、小学生たちの「おそらく二十四くらいの瞳が、揃ってきらきらと美しく輝いていて、マルオはへなへなと腰が砕けてしまいそうな可笑しさを感じ」る。「頭くるでしょあんなの」というヒカルの問いかけにも、マルオは「いや、あれくらいじゃ、あんまり」と返し、ヒカルの怒りとは対照的に、小学生たちのからかいを「可笑しさ」へと回収するのである（三四―三七頁）。もちろん、からかいに正当な怒りで対抗しても、空回りするだろうし、そもそも二十代の大人と小学生の間には圧倒的な力関係があり、怒ったとしても、ヒカルのほうが大人げなく見えるため、なおさら厄介である。[9] そのうえで、マルオは自身もヒカルも「人を差別したり見下したり笑ったりなんてしょっちゅうしている」（三七頁）と、ヒカルの怒りを相対化してしまう。

こうしたマルオの反応はしばしば肯定的に読まれてきた。代表的なものが、『夏の約束』の文庫版に収録された清水良典による「解説」である。清水は「ヒカルの怒り」と「マルオの寛大さ」の違いに目を向け、ヒカルの怒りは

正論だが、それゆえに、ヒカルが言うところの「八割」であるマジョリティとマイノリティとの間を「融和」させることはないという。一方、小学生たちの行為を「笑って赦すマルオの姿勢は、いわば両世界の断絶を横切って通行している」と述べ、マジョリティとマイノリティの間の壁を溶かし動かし得るものとして評価する。[10] これはマイノリティの「怒り」を無効化し、それどころかマジョリティを寛大に「赦す」という負担をマイノリティに暗に求めているという点で問題のある見解なのだが、それ以前に『夏の約束』のマルオに「両世界の断絶を横切って通行している」といった横断性や「赦す」ということが見出せるだろうか。

マルオの性格を特徴づけるものとして、ヒカルがマルオに何度か言う「びくびく」（五一、八四頁）しているという点が挙げられる。ヒカルと手をつないで歩いている際にも、「勘弁してよ」という発言者の見当たらない声をマルオが耳にするという一節もある（四五頁）。物語の現在では社内でもゲイであることはオープンになっているのだが、マルオにとっては「ひたすら隠しつづけた事実」であり、「やっとクローゼットから出てきたんだね」というヒカルの発言にもマルオはむしろ苛立つ（一八頁）。さらに、異性愛者と思しき会社の先輩に対して、「おそらく違う世界の人間」（六一頁）とマルオが心の中で思う一節もある。このようなマルオに「両世界」の横断性はうかがえない。第四章の場面に戻っても、小学生たちを寛大に「赦す」というよりは、「いや、あれくらいじゃ、あんまり」というマルオの発言が示唆するように、小学生たちの存在と行為を自分自身が許容できる「可笑しさ」へと矮小化することで、周囲の差別的な視線をやり過ごそうとするマルオのサバイバルの仕方が見られる。それは学生時代のマルオの経験――中学時代に「鶏小屋に閉じ込められた」り、高校時代に「空手バカを自認する上級生からサンドバッグ代わりに蹴られつづけた」り、大学時代に輸血の申し出を拒否されたりしたこと（五九頁）――と比べれば、まだマシ

だとするような考え方である。

マルオにマジョリティとマイノリティとの境界線の横断を見出す清水の読み方は、「マルオの柔軟さとタフさが、彼の身体と同義である」[11]というふうに、マルオの身体（体型）にも適用される。本稿でも、マルオの身体に注目しよう。暴飲暴食をするマルオは「週に二日は腹を下す」というのだが、会社の男子トイレの個室の壁に「青のボールペンでうすく「松井ホモ」と落書きされている」ことを発見する。落書きの薄さからは、小学生の露骨な好奇心と比較して、差別そのものが見えないものにされている大人の状況が読み取れるだろう。そしてそれ以来、マルオはその個室を使用するようにしているというのだが、マルオはその落書きに、「なんだか懐かしい響き」を覚え、「社会人になってもそんな幼稚な落書きをする人間がいるのかと思うと、マルオは不思議と生きる勇気が湧いてくるのを感じる」というのである（五八頁、第七章）。こうした展開に清水は「マルオの柔軟さとタフさ」を読むのだが、第四章の場面と同様、「柔軟さ」や「タフさ」というより、ここでも周囲からの差別やそれを行なう人びとをマルオ自身が許容できる「幼稚な」ものとすることで、「生きる勇気」を得ようとするマルオの姿が見えてくる。

そもそもマルオの身体については、同じ第七章に次のような一節がある。

> 思えば鶏小屋に閉じ込められたころのマルオは、まだそれほど太ってはいなかった。ローレル指数にして一三〇、「太りすぎ」ではなく「標準」から「太っている」の範疇。それが高校に入るころにはローレル指数一七〇、体重はもうすぐ三桁だった。美味いものでも不味いものでも、脂っこいものでもさっぱりしたものでも、しばらく駄目だった鶏肉でも、マルオはとにかく食べまくった。日々皮下脂肪をため込んで行き、弾力のある

からだを構築しなくてはならない。そうしなければ、生きていけないような気がした。（五九―六〇頁）

この一節を踏まえて、清水は「あらゆる人間を咀嚼し、あらゆる相手の感情をとり込んで「弾力」にしてしまう、こうした自己改造を経たたくましさが、マルオを支えている」[12]と読むわけだが、果たしてそう言えるだろうか。この箇所は時期的には「からだの中にいる悪魔を叩き出してやる、と空手バカを自認する上級生からサンドバッグ代わりに蹴られつづけた」（五九頁）というマルオの高校時代のエピソードに呼応しており、あくまでも他者からの攻撃（暴力）に耐えるための「皮下脂肪」と「弾力のあるからだ」が想定されている。したがって、「あらゆる人間を咀嚼し、あらゆる相手の感情をとり込」むのではなく、「あらゆる人間」や「あらゆる相手の感情」をはねかえし、距離を置くための「弾力」が求められているのではないか。なお、かつてのマルオは「鏡に映った自分の姿は、ときにぎょっとするほど醜かったけれど、それはむしろ自分の精神に相応しいもののようにも思えた」というのだが、「敢えて自分のようなタイプを好む人間がいることを知った」現時点では、自身の身体をある程度は肯定的に受け入れている様子である（六〇頁）。このように、「弾力のあるからだ」の構築は、マルオにとっては、「自己改造」という積極的なものではなく、生きるために可能であったぎりぎりの方法だったのではないか。

それに加えて、現時点のマルオについても、その身体に「タフさ」や「たくましさ」が指摘できるのだろうかという疑問が生じる。マルオが会社のトイレで落書きを発見した場面は、マルオが暴飲暴食のため、「週に二日は腹を下す」ということが背景にある。そこからは、トイレの落書きをはねかえすことができるような「弾力のあるからだ」を維持するために食べまくる（強迫観念的な暴飲暴食は現時点のマルオにも見られる）→腹を下す→トイレでその落

書きを再び目にするというスパイラルにマルオが無自覚的にはまり込んでいることが読み取れる。腹を下すという身体的な症状を踏まえても、マルオの身体は「タフさ」や「たくましさ」というより、壊れやすさを示唆しているように思われる。とはいえ、本稿で強調したいのはゲイ男性であるマルオの被傷性というよりも、マイノリティに「タフさ」や「たくましさ」を読み込んでしまう解釈の仕方の問題性である。[13] 清水の「解説」は『夏の約束』を肯定的に紹介するものではあるのだが、結果的にマイノリティであるゲイ男性に、マジョリティにとって都合のいいヒーローの役割が与えられてしまうのである[14]（清水の読み方はあくまでもマジョリティの目線に基づいたものである）。

ここで、本稿の最初に触れた「クィア」の議論と関連づけると、「クィア」という言葉は用いられないものの、清水がマルオに見出そうとするマジョリティとマイノリティの境界の横断性には、ある性のあり方を規範化し、それ以外を周縁化するような見方を再検討する「クィア」な「視点」との共通点がある。しかし、本稿でも述べてきたように、マルオ自身は異性愛男性を「違う世界の人間」ととらえ、「弾力のあるからだ」によって他者との間に距離を取ろうとするため、そうした意味ではマルオはゲイ男性ではあっても「クィア」な「視点」を持っているとは言い難いということになる。

2．平田たま代は（松井マルオも）語らない

第1節で述べたように、『夏の約束』には差別も書き込まれているが、その点だけが強調されないような語り方がされている。それは性的マイノリティが登場しても、とりたてて特殊な存在であるかのようには語られないという

ことであり、たとえば、『夏の約束』発表直後の創作合評においても、「本当に何年か前だったら特別な眼つきで見てしまうような要素を、ごく普通のこととして読者が受け取れるような書き方をしている」点や、マルオの学生時代のエピソードに関しても、「これも書きようによっては、それこそ何年か前のレベルでいえば、非常に陰惨なムードがどうしたって漂うものになるはずなのに、全然そういう印象はない」点が注目され、そこに新しさが見出されている。[15] また、食べるシーンにしても、第1節で触れたようなマルオの暴飲暴食だけではなく、「べつの坂を下ってスパゲティを二人で三皿食べ、大きな雑貨店をはしごして食器とクッションとポストカードを買う。京風たこやきを二軒食べ比べてから喫茶店に入ってカヌレを味わい、夕方になってマルオの部屋に二人で戻った」（四六頁）といったマルオとヒカルの楽しいデートの場面もあり、確かにそれもまた「とにかく食べまくった」という状況ではあるのだが、二人の何気ない一日の情景がテクストには組み込まれている。

このように、性的マイノリティを特殊化しない語り方を新しいものとして好意的にとらえる読み方がある一方で、その点に反発する見解もある。特徴的なものが石原慎太郎の芥川賞の選評である。石原は「『夏の約束』はホモという異常な世界を余儀なくする主人公たちのスケッチだが、これがまともなヘテロの人間世界だったら何の劇性もありはしまい。という批評は偏見に依るものだといわれても、私にはあくまで一人の読者として何の感興も湧いてこない」と述べる。「異常」と「まとも」という二項対立を前提に、「偏見」だと承知したうえで、わざわざ「まともなヘテロ」という立ち位置を取ってみせるのである。そして、「平凡な出来事の中で描いてホモを定着させることが新しい文学の所産とも一向に思わない。私にはただただ退屈でしかなかった」と続ける。[16] この選評は発表当初から問題視され、特に「偏見」を誇示する部分に目が向けられがちであったが、石原がここで俎上に載せているのは「平

凡な出来事の中で描いてホモを定着させる」ということであり、それは創作合評の評価のポイントとも重なる。石原はこのことを否定的にとらえ、創作合評ではそこに新しさが見出されているのである。なお、この石原の選評は、トイレの落書きのように普段は見えなくされている差別の所在を可視化するものであり、そのためか、芥川賞受賞後に『夏の約束』を取り上げた論考には、しばしばこの石原の選評が批判的に組み込まれることになる。[17]

早くから藤野千夜に注目してきた斎藤美奈子も、従来、性的マイノリティがただ単に「小説に綾をつけるための道具にされてきた」という点を踏まえ、「藤野さんは、そういう文学的な風土に抵抗があるんじゃないかな」と藤野のスタンスを的確に指摘する。そのうえで、石原の選評にも言及しながら、「芥川賞のときの選評のあのとんちんかんぶりは何かと思う」と続ける。[18] ただし、先ほども確認したように、石原の選評は「とんちんかん」というより、藤野作品の特徴を感知したうえでの意図的な差別と言うべきものだろう。だからこそ、よりいっそう深刻なものである。

それでは、石原が述べる「平凡な出来事の中で描いてホモを定着させること」ではないような語り、つまり、その異質性を際立たせるような語りとはどのようなものだろうか。[19] それは自らの性的指向が異性愛者と違うのはなぜなのか、といったゲイの原因追及に関わるものだろう。異質であるからこそ原因が探られ、また、原因が探られることで、異質性はより特徴的なものとして語られることになる。さらに、それに付随して、ゲイであるということに気づいた時に、どのように悩み、葛藤したのか。そして、いかにしてそのような異質性を内面化したのか、あるいは、異質性という見方を乗り越えたのかというようなテーマが浮かんでくる。このように考えると、『夏の約束』ではそうした点が語られないという側面が改めて浮かび上がる。[20] その内面がもっとも多く語られるマルオにしても、

暴力的に差別され、排除されたエピソードについては触れられるわけだが、マルオが自身の性的指向そのものに深く悩んだり、ゲイであることを拒絶するような様子はない。諦念であるようにも感じられるが、それでもゲイであること自体は最初から受け入れているように読めるのである。したがって、ゲイであることの原因が追求されることもない。

また、トランス女性であるたま代も同様で、そもそもたま代に焦点化した語りが用いられないということもあり、自らの性自認についてたま代がどのようにとらえているのかということや、トランジションの過程についてもいっさい語られない。しばしば性的マイノリティの原因とみなされる家族関係についても、とりわけ光が当てられることはない。一方で、トランスフォビアの存在はテクストに書き込まれている。たとえば第一章には、たま代を見かけたマルオの会社の後輩がマルオに「さっき会ってた人、本当に女の人ですか」、「本当かなあ、カマくさかったけどなあ」と「いかにもゲスな感じ」で呟く場面がある（一五―一六頁）。また、第九章では「夫婦喧嘩のとばっちり」で、「アパートの二階から飛んで来た銅製の片手鍋」がたま代の顔を直撃し、たま代は骨折してしまうのだが、その出来事に続いて、「本当に可哀相なたま代。それなのに情け容赦のない新聞には、「男性美容師」と本人が絶対見たくないであろう文字が躍ったし、とどめに今、病院では男の六人部屋に押し込められている」という一節が、たま代には焦点化しない語りによってテクストに組み込まれる（一一四頁）。そして第十一章には、たま代の入院先をマルオとヒカル、菊江とのぞみが見舞った際、のぞみに向かって、「隣のベッドに新しく入った中年男性が、［……］あんた、おかまちゃんの友だち？　とぎすぎすした声で訊いた」という一節もある（一一六頁）。こうした周囲からのトランスフォビックな発言、さらには発言内容だけではなく、差別意識が滲み出ている「いかにもゲスな感じ」

や「ぎすぎすした声」に、マルオやのぞみは反感を抱くのだが、先ほども触れたように『夏の約束』ではたま代の内面はいっさい語られないため、そのことをたま代がどのようにとらえているのかについても最後まで明かされることはない。

たま代は自分自身の内面の語りにくさを抱えた人物として登場するとも言えるわけだが、同時に、読者が知りたいと思うようなことをあえて語らないという戦略、つまり、答えのようなものをそう簡単には提示しないという戦略がこのテクストでは取られているというふうにも考えられる。いずれにしても、それぞれの思いが詳細に語られることはなくても、マルオとたま代が、さらにはマルオの腕の中で「ずっと眠ったようにおとなしくしている」たま代の飼い犬のアポロンも含めて、「それでも肩を寄せ合って歩く」（一〇五頁）という第九章の印象的な一節のように、時に怒りつつ、時に深刻な話を受け流しつつ、「それでも肩を寄せ合って歩く」というような関係性が『夏の約束』では展開するのである。

このような関係性を「クィア」とみなす論者もいる。跡上史郎は、『夏の約束』のマルオたちを「職業や社会的立場などまちまちで、お互いのセクシュアリティの違いにもほとんど拘泥せず、ゆるやかにつながる、二十歳代後半くらいの若者によるコミュニティの中の一部分なのだ」とし、「彼／女らの示す様態はクィアかもしれない」と述べる。ここでの「クィア」は「既存の支配的なセクシュアリティのあり方に違和感を抱き、それが変わっていくことを願う人びとをつなぐ」という意味合いであり、それは本稿の冒頭で挙げた「より多くの人たちによる連帯」の可能性を「クィア」に託す用法と重なる。同時に跡上は「クィア」という侮蔑語が価値転覆的に意味づけなおされた過程の政治性を想起しつつ、マルオたちが「特に政治的に共闘しているわけではなく、都会の平凡な生活のなかで

なんとなく曖昧につながっている」点を踏まえ、「「ちょっとクィア」くらいかもしれない」と補足する。[21] まずは小説の発表から間もない段階で、『夏の約束』が「人びとをつなぐ」、「連帯」を模索する意味での「クィア」と関連づけて考察されていたという点について、本稿でも確認しておきたい。

3. キャンプは未来へと先送りされる

さて、跡上は、規範に違和感を抱く人びとのつながりとしての「クィア」を広げ、『夏の約束』におけるキャンプを、「ゲイもTS[22]もヘテロセクシュアルも障害者も手を携えることのできる困難な希望としてのクィアのことなのかもしれない」[23]ととらえる。本稿でも作中で話題になるキャンプに目を向け、テクストでどのように語られているのかをたどってみよう。『夏の約束』は次の一節で始まる。

八月になったらキャンプに行こうという約束を、松井マルオはすっかり忘れていた。というよりも最初から、あまり本気の話とは考えていなかった。（七頁）

まずはマルオにとってキャンプはそれほど重大なイベントではないということがうかがえる。ヒカルに「キャンプだよ、キャンプ」と「じれたように告げられて」、ようやく思い出したといった具合である（八頁）。同じ第一章には、マルオがヒカルに「ねえ、キャンプのこと、誰に聞いた?」と尋ねる一節もあり（一〇頁）、キャンプの約束は

謎のように提示されるのだが、第二章では「ひそかにキャンプの話を進めているのが、どうやらたま代らしい」とあっけなく明かされる。だが、「そもそもキャンプに行こうと言い出したのがたま代だったか、それともほかの誰かだったのかは、今となっては思い出せない」と続き、ここでもキャンプはその程度のものとしてマルオに受け流されてしまう（二四頁）。

第三章ではキャンプの発案者はたま代であったことが改めて確認される。下北沢で行なった「四月のお花見のとき、やっぱりたま代が提案した」のであった（二九頁）。だが、「でも半分くらいは、いかにもその場だけの約束といった感じだったかもしれない」とも述べられ（三一頁）、その時点ですでにキャンプの約束は（たま代以外には）あまり真剣にとらえられていなかったようである。第八章でも、たま代からのぞみへ「ねえ、菊ちゃんはキャンプに乗り気になった？　こないだはちょっと面倒くさそうだったけど」とキャンプの話が出されるが、のぞみは「ん、わかんない」と軽く流す（六七―六八頁）。ただし、ここで話題になっている菊江にとっては、キャンプはそれほど軽く流すことはできないものであることが第十章の菊江の一人称の語りによって明らかになる。

さらに、第九章でも、マルオとたま代の間でキャンプの話が出る。マルオが美容師であるたま代に髪を切ってもらっている場面に、次のようなやり取りがある。

「じゃあ、マルオはちゃんと行くね。この場だけの話じゃ駄目だよ」

「ああ」

うなずきそうになって、たま代にあたまを押さえつけられた。「でも、ずいぶん張り切ってるよね。キャンプに

なにか楽しい思い出でもあんの」

「ないよ」

柔らかな調子だったものの、たま代は即答した。「ないから行きたいんじゃない」（九二頁）

「キャンプになにか楽しい思い出でもあんの」と尋ねるマルオに対して、「ないよ」とたま代は「即答」する。第2節で触れたように、たま代は内面を語らない人物として登場している。だからこそ、たま代の短い言葉は、具体的なことが語られない分だけ、印象的なものとして読者に響く。[24] 一方で、「キャンプにいい思い出ってある?」とたま代に聞き返されたマルオは、「ないね。バンガローから追い出されたりしたな。大菩薩峠のバンガロー」と答える。第七章で語られていたように、中学時代に鶏小屋に閉じ込められたり、キャンプではバンガローから追い出されたり、学校や学校に付随した空間においてマルオには移動の選択権がないかのようである。ただし、たま代の「ないよ」よりはマルオの「ないね」のほうが具体的な内容が語られるとはいえ、この話もここから展開するわけではなく、「へえ」「みんなそんなもんでしょ」「そうだね」というやり取りが続くだけである（一〇五頁）。

次の第十章では菊江の一人称の語りが用いられ、小学生時代の「よくわからないキャンプ」（一〇八頁）の記憶が語られる。菊江には「なかよし学級」に通っていた知的障害のある四つ年上の兄がおり、菊江が二年生の時に、学校の行事で六年生の兄と一緒にキャンプに行ったのであった。菊江の兄はキャンプのために買ってもらった麦わら帽子を嬉しそうに被っていたのだが、「同い年の普通のクラスの子たちに囲まれて取り上げられ」てしまう。兄は菊江に助けを求めるのだが、幼い菊江は何もできず、「最後に男の子の一人が帽子を谷の方に向かって放り投げて終わ

り。／それがさあ、その帽子がまたやけにきれいに飛んで行くの。アダムスキー型円盤みたい、っていうか、なんか、そんな感じ」とその時のことが思い出され、「私、それからキャンプって嫌いなんだ。すごく嫌い」と第十章は締めくくられる。なお、菊江の目線で「田舎もんのさえないガキ」と称される、兄を囲んでいた小学生たちは、第四章でマルオとヒカルをからかう小学生とも重なるだろう（一〇九―一一〇頁）。

菊江とこのキャンプのことは、菊江の幼馴染でもあるヒカルの発言を通して、第十一章で「すごく助けたかった［……］でもきっと、助けたくなかったんだ［……］お兄さんが人と違うこと、まだ認められなかった［……］違ってもいいんだとはまだ思えなかった」と語りなおされる（一一八頁）。つまり、キャンプとは大多数の人びとと違っていない人、言うなればマジョリティのために用意された空間であり（それは性的なマジョリティに限定されない）、そうであるからこそ、自分たちのキャンプの実現にたま代はこだわっているのではないか、ということが推測される。[25] ただし、たま代のキャンプの参加予定者はマイノリティに限定されてはいないし、マイノリティであれば皆キャンプから排除されるというわけでもないだろう（そのように思い込むのもまた偏見である）。登場人物の中でも、少なくともヒカルはキャンプにまつわる苦い記憶を持っている様子はない。

しかし、八月になっても、キャンプは実現されない。というのも、第2節で引用したように、たま代が怪我をして入院することになったためである。「たま代があれだけ楽しみにしていたキャンプの計画も、残念ながら今夏はお流れにすることになるだろう」（一一四頁）ということになったのだ。そもそもキャンプの話には、たま代以外の人たちは乗り気になっていなかったわけだが、「残念ながら今夏は」ということで、キャンプが立ち消えになったというよりは、来年の夏に持ち越されたというニュアンスが感じられる。第九章で、マルオの部屋でマルオとヒカルと

ともに食事をした時に、「私、未来がわかるんだよ」（八〇頁）と言った岡野かおるの予言[26]の仕方を真似るヒカルの次のような言動で『夏の約束』は締めくくられることになる。

それからコックリさんにでも訊ねるみたいな抑揚のない調子で、来年私たちはみんなでキャンプに行けるでしょうか、と言った。（一二一頁）

このようにキャンプへの言及によって『夏の約束』は始まり、少々オカルト風な語り口になっているものの、それが「来年私たちはみんなでキャンプに行けるでしょうか」と未来へ先送りされることで、物語は終わるのだ[27]。

ここで、本節の冒頭で参照した跡上の見解に戻ろう。跡上は『夏の約束』のキャンプを「ゲイもＴＳもヘテロセクシュアルも障害者も手を携えることのできる困難な希望としてのクィアのことなのかもしれない」と読み、キャンプと「クィア」を重ねる。ただ、そのキャンプは実現すると、「ゲイもＴＳもヘテロセクシュアルも障害者も手を携えることのできる」というような特別なものにはならないかもしれない。下北沢での花見はすでに行なわれており、おそらくはそれと近いものになりそうである。だいたいたま代以外の登場人物たちはキャンプをそれほど重視しているわけではない。だからこそ、「クィア」としてのキャンプは「困難な希望」であるとも言える。本稿では、跡上の見解を引き受けつつ、そのキャンプが未来へと先送りされて、物語が終わりを迎えるという点に改めて注目したい。

そこで「クィア」についての見解をもう一つ参照しよう。クィア理論家のホセ・エステバン・ムニョスは「クィ

アネスはまだここにはない。クィアネスは観念的なものである。言い換えれば、私たちはまだクィアではない。私たちはクィアネスに触れることは決してないかもしれないが、潜勢力の染み込んだ地平線の暖かな明かりのように感じることはできる」と「いま」と「ここ」にはまだないものとして「クィア」を意味づけ、「未来はクィアネスの領域」であり、「クィアネス」は「未来のために、未来に向けて、単に存在するというだけではなく、行なうことでもある」と述べる。[28] この見解を踏まえると、『夏の約束』におけるキャンプとは、「いま」と「ここ」では実現できないが未来に垣間見えるような何かであり、タイトルにもなっているキャンプの約束はそのような「未来のために、未来に向けて［……］行なうこと」ととらえることができるだろう。つまり、未来へと先送りされるということ自体を「クィア」と結びつけて解釈することが可能なのである。

おわりに

ところで、ムニョスは「クィアネス」の未来性を、アメリカの詩人のフランク・オハラの詩に見出している。オハラの「君と一緒にコークを飲むのは」（一九六〇年）という詩の中で、コカ・コーラというありふれた商品を「人々と彫像の前でぼくらの微笑がまとう秘密」[29] とともに同性の恋人と一緒に飲むという喜びに満ちた一節に、「クィアな関係性の広い生活世界、暗号化された付き合い、ユートピア的な潜勢力」を示す「日常の行為」を指摘するのである。オハラの詩自体は現在＝「いま」と「ここ」に関するものなのだが、ムニョスは未来を約束する現在として、その「いま」と「ここ」を読みなおしてみせるのだ。[30]「クィアネス」の未来性が論じられる際、どこか遠くの彼方の世

界が設定されるのではなく、コカ・コーラを一緒に飲むという「日常の行為」に目が凝らされているのである。

この点を『夏の約束』で考えてみると、キャンプの話題が出ていたのは、マルオがヒカルの部屋を訪れたり、たま代が菊江の部屋に遊びに来たり、マルオがたま代に髪を切ってもらっていたりといった、登場人物たちにとっての「日常」の一場面においてであった。「少しハズれた彼らの日常」という作品の紹介が示唆するように、これまでも『夏の約束』の特徴として「日常」には光が当てられていたのだが、キャンプの約束を「未来のために、未来に向けて［……］行なうこと」としての「クィア」ととらえてみると、『夏の約束』の「クィア」もまさに「日常」の中に散りばめられたものだということになる。(31)

以上、本稿では藤野千夜の『夏の約束』を「クィア」で読んできたわけだが、最後にもう一度本稿の出発点に戻ってみよう。「クィア」という言葉に、「いま」と「ここ」にすでに存在している性的マイノリティの「総称」という意味合いだけでなく、「いま」と「ここ」にはまだない――しかし、ただ単に「いま」と「ここ」を否定するのではなく、「いま」と「ここ」で繰り広げられている「日常」の中に感じられるような――未来への何かを読み込んでいく試みによって、「論争的な言葉」である「クィア」はよりいっそう「論争的」なものになり、さらに思いがけない方向へと開かれていくことになるだろう。

注

(1) 菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく1―アイデンティティ、コミュニティ、スペース』晃洋書房、二〇一九年、一頁。

(2) 菊地・堀江・飯野編、前掲書、三―五頁。

(3) ジュディス・バトラーは「クィア」という語の「偶然性を肯定すること」、「今は予想できない意味をその語に自由に帯びさせること」を重視し、「この語がその使用を予め完全には制約できない言説的な場になり得る、という事実は、クィア政治を持続的にデモクラシー化するためだけでなく、この語に固有の歴史性を明るみに出し、肯定し、作り直すためにも、擁護されるべきなのである」と述べる（ジュディス・バトラー『問題＝物質となる身体―「セックス」の言説的境界について』（佐藤嘉幸監訳）以文社、二〇二一年、三一五頁）。

(4) 黒岩裕市「差異とつながりと攪乱の暴力―藤野千夜『少年と少女のポルカ』と「クィア」」（菊地夏野・堀江有里・飯野由里子編『クィア・スタディーズをひらく3―健康／病、障害、身体』晃洋書房、二〇二三年）では「クィア」と関連づけ、藤野千夜の『少年と少女のポルカ』を読んだ。

(5) 藤野千夜『夏の約束』講談社文庫、二〇〇三年。『夏の約束』からの引用はこの版に拠り、本文中に頁数を記す。

(6) 坂上弘・久間十義・室井光弘「創作合評」（『群像』二〇〇〇年一月号）四三七、四三八頁。

(7) 黒井千次「静かな力と重い力」（芥川賞選評）（『文藝春秋』二〇〇〇年三月号）三六〇頁。

(8) 『夏の約束』の文庫本（講談社文庫）のカバー裏表紙の一節。

(9) 「からかい」の問題性に関しては、江原由美子「からかいの政治学」を参照のこと（江原由美子『女性解放という思想』ちくま学芸文庫、二〇二一年）。

(10) 清水良典「解説　アダムスキー型円盤帽子は「世界の八割」に届くか？」（藤野千夜『夏の約束』講談社文庫、二〇〇三年）一九〇―一九一頁。

(11) 清水、前掲書、一九二頁。

(12) 清水、前掲書、一九二頁。

(13) 清水は「社内の人間関係をこなす体育会系の言葉づかいや態度」（清水、前掲書、一九二頁）にも、マルオの「たくまし

さ」を見出す。たとえば、第七章には、上司が「よう、松井ちゃん、相変わらず太ってんね」と言い、マルオが「うっす」と返答するやり取りがある。「体育会系の返事」をするマルオには「武道のたしなみは一切ない」（六一頁）ため、「うっす」というような言い方は、マルオが自覚的に用いているということになる。だが、こうした言葉づかいも、自分自身をネタやキャラにすることで、他者との距離を確保するマルオのサバイバルの手段なのではないか。なお、マルオは友人たちとの交流の場面でも、「飲むと俺にからむ」（三二頁）という菊江に対しては（つまり、苦手意識のある相手には）、「暑いっすよ、とわざわざ眉間に皺を寄せて答え」る（一一二頁）。

(14) マルオを「タフ」で、マジョリティとマイノリティの間を「柔軟」に横断すると読む清水の読み方には、臨機応変にフレキシブルに振舞うことを特権化し、さらに、そうした振舞い方を自己責任や自己監視に基づいた「自己改造」によって、身につけることを重視するネオリベラリズム的な価値観との共通点もうかがえる。したがって、そこには、ネオリベラリズム的な価値観と合致するような性的マイノリティをことほぐという問題も指摘できる。

(15) 坂上・久間・室井、前掲書、四三九、四四一頁。

(16) 石原慎太郎「輝き無し」（芥川賞選評）（『文藝春秋』二〇〇〇年三月号）三六三頁。当時の石原は東京都の都知事でもあったため、その発言の問題性はより大きなものになる。

(17) 金井景子「「文学作品」がジェンダー・フリー教材になるとき―揺らぐこと、揺さぶることをめぐって」（『文学』第三巻第一号、二〇〇二年）一九一頁。跡上史郎「クィア―藤野千夜『夏の約束』」（『國文學　解釈と教材の研究』二〇〇一年二月臨時増刊号）一三九頁。

(18) 川村湊・清水良典・斎藤美奈子「座談会　二〇〇一年の文学　日本文学の新潮流」（『群像』二〇〇一年三月号）二一八頁。

(19) この問いに続く一節は、松浦理英子「講演　文学とマイノリティ」（『すばる』二〇一四年一一月号）における問題提起を参考にしている。

(20) 一方、『夏の約束』では、性的マイノリティを特殊化するような語りを含むものについても言及されている。それはゲイバーでマルオが耳にする「梓みちよの『ナラタージュ』」（四〇頁）という曲である。「ナラタージュ」（作詞：阿木燿子、作曲：筒美京平、一九八〇年）では、自身が規範的な性とは異なった生き方をしてきた／していることが、自らの生い立ちや家庭環境を絡めながら、秘密として仰々しく語られる。もっとも、そうした過剰にステレオタイプ的な語りは、梓み

ちよのパフォーマンスによって再現されると、注（27）で述べるようなキャンプ的感覚を濃厚に纏うことにもなる。

（21）跡上、前掲書、一三七―一三八頁。この論考は二〇〇一年に発表されたもので、「恋愛のキーワード集」という特集の一部である。

（22）跡上の別の論考にあるように、「TS」は「トランスセクシュアル」の略語で、「自身の性自認において、戸籍や生物学的な性別と反対の意識を持ち、外科的手術によって身体、特に性器を異性のものに変更すること、またはそのような欲求が強い人たちのこと」と説明される（跡上史郎「セクシュアル語彙解説」（『國文學　解釈と教材の研究』一九九九年一月号）一二七―一二八頁）。そこでは性別適合手術まで必要としていない（狭義の）「トランスジェンダー」（TG）、性自認の問題とは別に異性装をする「トランスヴェスタイト」（TV）の項目と「TS」が並べられているが、九〇年代には「TS」、（狭義の）「TG」、「TV」によって、（広義の）「トランスジェンダー」概念が形作られるようになったとも言われる（森山至貴『LGBTを読みとく―クィア・スタディーズ入門』ちくま新書、二〇一七年、一〇一頁）。『夏の約束』でもたま代のことは「男性から女性へのトランスセクシュアル」（一二頁）と語られているのだが、本稿では二〇二三年現在の用語である「トランス女性」という表記を用いている。

（23）跡上、前掲書、一三九頁。

（24）同じ第九章の「私が人を殺してもアポロンは私を好きなんだろうな、って思ったときはちょっと泣いたね」というたま代の発言も該当する（一〇四頁）。この発言にしても、具体的な出来事が語られるわけではない。

（25）第九章には、たま代がマルオとともにアポロンを連れて行った大きな公園で「豪華そうな食事」を取っていた「家族」が「公園の脇に停めたキャンピングカーに向かっていた」という一節もある。たま代は「子供、可愛いね」と「去って行く家族に視線を送りながら」言い、マルオもそれに同意する。子供を連れた「家族」が乗る車がわざわざ「キャンピングカー」と明記される点からも、キャンプというものがシスジェンダー、異性愛中心的な空間であるということがほのめかされる。とはいえ、この「家族」は「小さな子供を三人連れた欧米人と東洋人らしいカップル」であり、日本社会の「家族」のマジョリティからは微妙にずらされてもいる（一〇〇―一〇一頁）。

（26）かおるは、「私、未来がわかるんだよ」（八〇頁）と提案しつつも「お酒入ってるとうまくいかないの。だから今度ね」（八二頁）と予言を先送りする。第十一章にも「岡野さんがね、今度本当に遊びに来て、って言ってた」（一一九頁）とヒ

カルがマルオに告げる場面がある。こうした「今度」からは、かおるとマルオやヒカルとの交流の持続可能性がうかがえる。ただし、それは予感として示されるにとどまり、作中で交流が深まるわけではない。

(27) 連想ゲーム的ではあるが、キャンプの約束から、ゲイ・カルチャーにおけるキャンプを想起してみたい。「キャンプ」とは辞書では「これみよがしの、誇張された、見せかけの、芝居がかった、オカマの、または同性愛的な」(『オックスフォード英語辞典』第二版)などと定義されるものであるが、この言葉を批評用語として広めたスーザン・ソンタグの「《キャンプ》についてのノート」を参照すると、「キャンプの本質」は「不自然なもの」や「人工と誇張」を愛好することと説明される。また、キャンプの代表的なものとしては、(ソンタグはキャンプをゲイ・カルチャーに限定していないが)ドラァグ・クイーンのパフォーマンスが挙げられる(スーザン・ソンタグ『反解釈』(高橋康也他訳)ちくま学芸文庫、一九九六年、三〇三頁。坂井隆「〈流用〉する/される〈キャンプ〉—一九三〇年代のメイ・ウェストと一九七〇年代のメイ・ウェスト」(『演劇学論集』第四三号、二〇〇五年)も参照した)。このキャンプを『夏の約束』に関連づけると、「ポリシーとファンタジーはべつものなの」(七一頁)と言い、「ベッドの上ではまるっきり古いタイプのおねえ」(三八頁)になると語られるヒカルにキャンプ的な感覚が見出せる。一方、ヒカルの振舞いを理解しつつも共感はしないマルオにはキャンプ的な感覚はあまりうかがえない。さらに、最後のヒカルの「コックリさんにでも訊ねるみたいな抑揚のない調子」も「不自然なもの」や「人工と誇張」という点ではキャンプに結びつくかもしれない。この点についても、マルオは「オカルトっぽいものはあまり得意ではない」(八〇頁)という。

(28) José Esteban Muñoz, *Cruising Utopia: the Then and There of Queer Futurity*, New York University Press, 2009, p. 1.「クィアネス」の未来性を重視するムニョスは、クィア理論における反再生産的未来主義を問いなおそうとする。その代表的な論者であるリー・エーデルマンに対して、エーデルマンの議論に敬意を払いつつも、「クィアネスとは第一に未来性と希望についてのものである」とムニョスは応答する(*Ibid.*, p.11)。ムニョスについては、井芹真紀子「まだ—ここにないクィアネス—ホセ・E・ムニョスが読むフェリックス・ゴンザレス=トレス」(『美術手帖』二〇一七年一一月号)も参照のこと。

(29) フランク・オハラの「君と一緒にコークを飲むのは」の翻訳は飯野友幸『フランク・オハラ—冷戦初期の詩人の芸術』(水声社、二〇一九年、一八九—一九〇頁)を参照した。

(30) José Esteban Muñoz, *op.cit.*, p. 6.

(31) 文体の面から、「平易で散漫な日常の文体からけっして離脱しないということが、自己の生の肯定と直結した問題になっている」と藤野千夜の作品を分析するものもある（土田知則・青柳悦子『文学理論のプラクティス―物語・アイデンティティ・越境』新曜社、二〇〇一年、九六頁）。本稿の第2節で引用したマルオとヒカルの何気ない、しかし、嬉しそうなデートの情景を語る一節などがそれに該当するだろう。